

平成14年度 オホーツク海沿岸におけるサンマ漁況の見通し

(この予報は北海道立釧路水産試験場が作成しているもので、東北水研は予報の作成に協力しています。)

平成14年9月26日

北海道立釧路水産試験場・網走水産試験場・稚内水産試験場

独立行政法人水産総合研究センター東北水産研究所・北海道水産研究所

【漁況見通し】

来遊資源量：昨年を下回る

太平洋海域の中型・小型魚の分布量は昨年よりやや多いと推定されるが、南千島海域の水温が低くオホーツク海への回遊条件は良くない。

魚体組成：中型・小型魚主体で、昨年より小さい

9月中旬の漁獲試験では、中型・小型魚が主体に漁獲された。

来遊時期：昨年よりやや早い

8月から9月上旬のオホーツク海南部海域の表面水温は昨年より低いため、北海道沿岸への魚群の来遊時期はやや早まる。

魚体説明：特大魚（体長32cm以上）、大型魚（体長29-31cm台）、中型魚（24-28cm台）、小型魚（20-23cm台）、ジャミ（20cm未満）

1. 昨年(平成13年)の漁況

平成13年のオホーツク海のサンマ漁獲量は3,539トンで、平成12年(5,323トン)の約66%に減少した(図1)。棒受網漁船のC P U E(1隻1晩あたり漁獲量)は7.2トンで、過去4年間(平成9年~12年)の7割程度に落ち込んだ(図2)。

平成13年のサンマ漁は9月中旬から散発的に行われ、10月上旬には日計70~80トンの水揚げが紋別港で見られた。本格化したのは10月中旬(10/15)からで、この頃の漁場は表面水温10~11台のウトロ沖や紋別沖に形成され、大型・特大魚を含む中型主体のサンマが日計550~670トン(網走港、紋別港)水揚げされた。ウトロ沖の漁場は2日ほどで消滅し、その後は表面水温10~13台の網走~沙留の沿岸域で日計100~200トンのサンマが漁獲されたが、10月下旬にはほぼ終漁した。

平成13年に棒受網漁船で漁獲されたサンマの魚体は中型魚主体で、例年漁獲の少ない大型・特大魚も漁獲物の2割程度を占めた。特に10/15のウトロ沖では、大型・特大魚が漁獲物の約4割を占めた。海域別にみると、斜里より東の海域では大型魚の比率が高く、沙留より西の海域では中型魚が主体に漁獲された。

2. オホーツク海で漁獲されるサンマの回遊

例年オホーツク海で漁獲対象となる魚群は中型・小型魚が主体で、この群は南部千島太平洋側へ接岸したものの一部が、7月から8月にオホーツク海へ移動・回遊するものと考えられる(図3)。従って、7月から8月に太平洋海域に分布する中型・小型魚の分布量が多く、なおかつ南部千島海域の表面水温がサンマの移動・回遊に適していれば、オホーツク海への来遊資源量が多いと考えられる。オホーツク海に回遊したサンマは、8月から9月頃はオホーツク海の中南部海域に広く分布するが、秋期に海水温が低下すると、比較的水温が高い(10以上)北海道沿岸域へと移動しここに漁場が形成される(図3)。

3. 来遊資源量

東北水研が漁期前（6月から7月）に実施したトロール調査結果から、東経162度以西の太平洋海域における中型・小型魚の分布尾数は85.4億尾と推定され、これは昨年同時期の分布尾数（74.5億尾）をやや上回った。従って、今年の太平洋海域における中型・小型魚の分布量は、昨年よりもやや多いと推測される。

南千島海域の表面水温が高い時には、サンマがオホーツク海へ回遊する条件が良好であると考えられている。今年の7月中旬から8月下旬の南千島海域における表面水温10以上の面積数（図4）は、まとまった漁獲が見られた平成8年以降では最も低く推移した（図5）。つまり、この時期南千島海域がサンマの回遊に適さない水温10以下の水に広く覆われていた。従って今年の太平洋からオホーツク海への回遊条件は良くないと考えられる。

以上のことから、太平洋海域における中型・小型魚の分布量は昨年よりやや多いと推測されるものの、南千島海域の水温はサンマがオホーツク海に回遊するには適さないため、今年のおホーツク海のサンマ来遊資源量は、昨年を下回ると考えられる。

4. 魚体組成

昨年のおホーツク海では、当業船（棒受網漁船）は大型魚を含む中型魚主体のサンマが漁獲し、漁期中（10月）に調査船で行った流し網調査でも、中型魚を主体に大型魚が混じった漁獲物が採集された。一方、今年の9/9～9/12に実施した調査船によるおホーツク海域の漁獲調査では、大型魚は漁獲されず中型・小型魚主体のサンマが漁獲された（図6）。また、今年8月に道東太平洋海域で漁獲されたサンマ中型・小型魚の体長モードは24～25cmで、昨年（27～28cm）より小さかった（図7）。以上のことから、今年の魚体組成は中型・小型魚が主体で、昨年より小さくなると考えられる。

5. 北海道沿岸域への来遊時期

今年の8月から9月上旬のおホーツク海南部海域（北緯45°～47°，東経144°～147°）の表面水温は主に15以下となっており、昨年同期（主に15～17台）より低く推移した（「太平洋漁海況速報」漁業情報サービスセンター）。このため太平洋からおホーツク海へ回遊したサンマが北海道の沿岸域に移動する時期は昨年よりやや早まると考えられる。

6. 初漁日

夏季の沿岸域の最高表面水温とサンマ初漁日の間には、漁獲量が多い年は水温が低い年ほど初漁日が早くなる傾向が見られる（図8）。しかし、漁獲量が少ない年の初漁日にはバラツキが見られ、水温が低くても初漁日が遅れることがある。これは、来遊資源量が少なくまとまったサンマ魚群が見られなかったため、出漁が控えられたためと考える。

今年の夏季最高表面水温は15.2と昨年（17.6）より低いため、初漁日が早まるとも考えられるが、来遊資源量が少ないと予想されることから、サンマが沿岸域に来遊しても漁場がほとんど形成されないか形成時期が遅れる可能性がある。

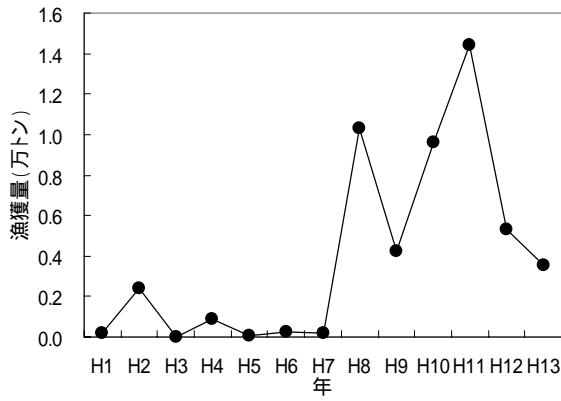


図1 オホーツク海におけるサンマの総漁獲量

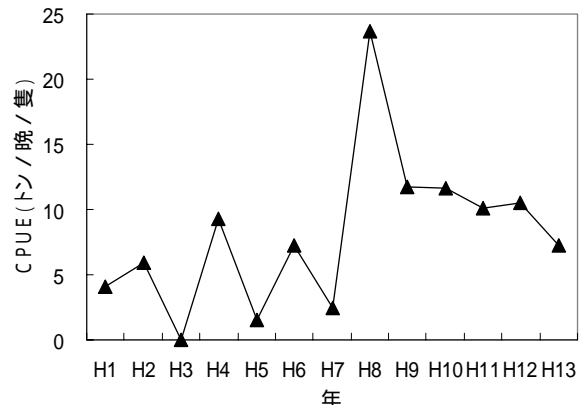


図2 オホーツク海棒受網漁船のCPUE

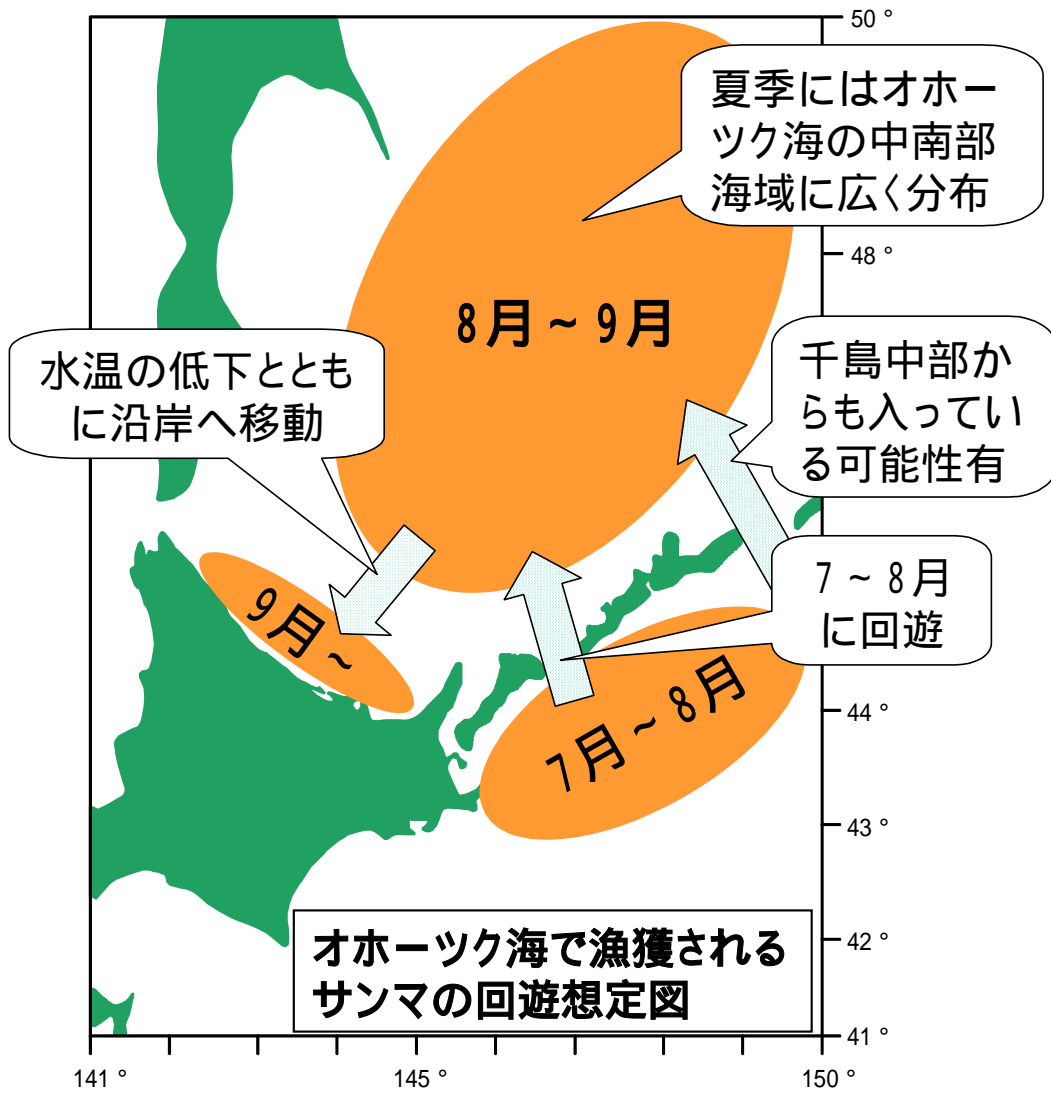


図3 オホーツク海で漁獲されるサンマの回遊想定図

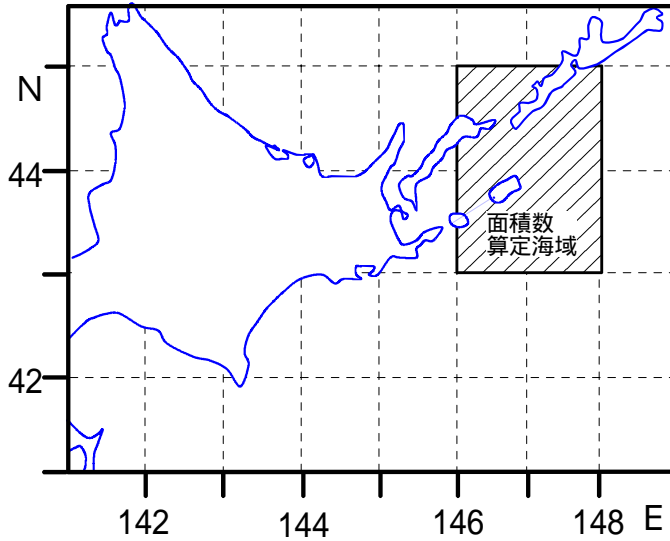


図4 表面水温 10 以上の面積数を算定した海域(緯・経度1度で囲まれた面積を1として算出)

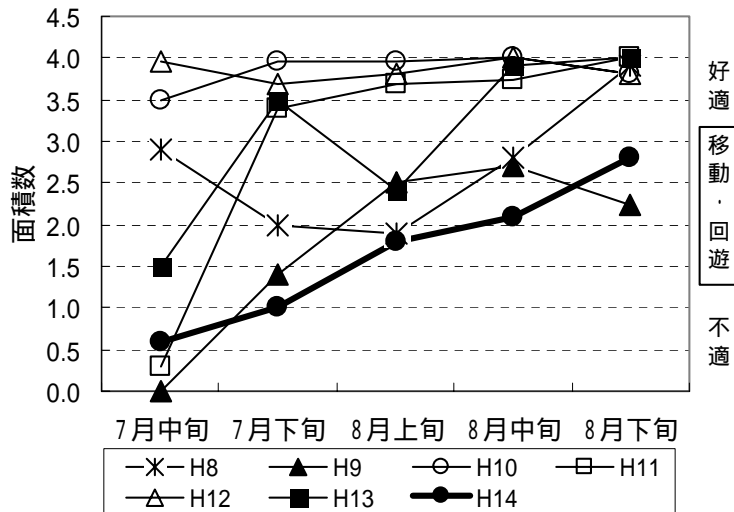


図5 南千島海域における表面水温 10 以上の面積数

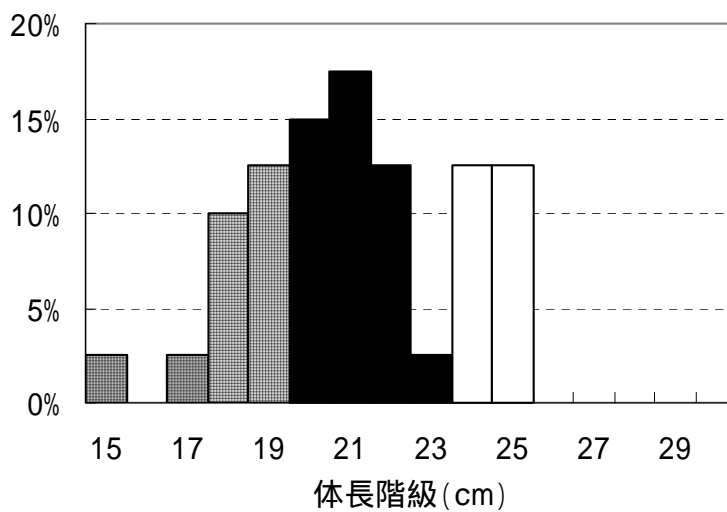
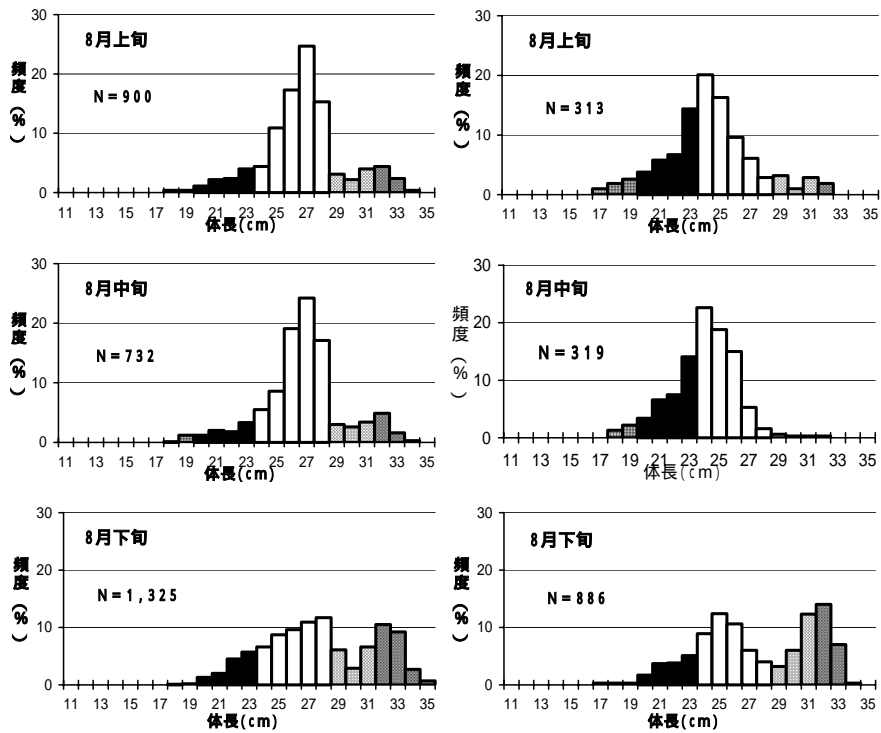


図6 調査船がオホーツク海で漁獲したサンマの体長組成図 (体長 15cm 以上の漁獲物のみ図示)

□ : 中型魚 (24 ~ 29 cm)
 ■ : 小型魚 (20 ~ 24 cm)
 ▨ : ジャミ (20 cm 未満)



釧路水試とJAFIC資料、千葉水試千葉丸&房総丸資料、茨城水試水戸丸資料より作成



図7 道東太平洋海域で棒受網漁船が漁獲したサンマの体長組成
(左：平成13年，右：平成14年)

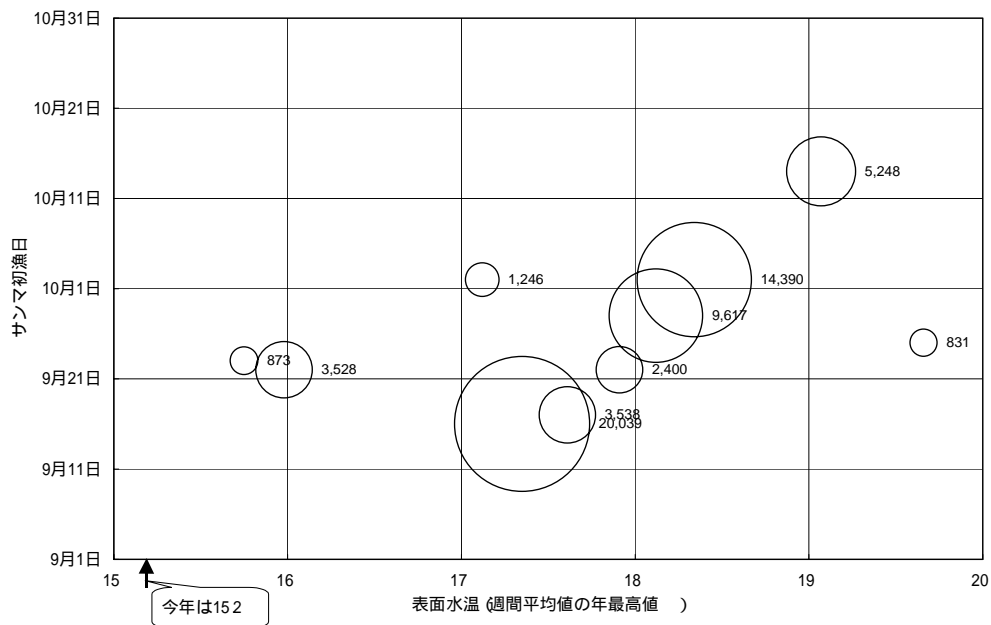


図8 オホーツク海沿岸における夏季表面最高水温とサンマ初漁日の関係
(図中の数字は漁獲量(トン)を示す)
漁獲量が500トン以上の年のみ図示